

春告草

第169号 令和2年1月29日 進路指導部発行

ラストセンターを振り返る（第1回）

最後のセンター試験が終わった。図表や史資料などが多く用いられた試験で、来年から始まる新テストを見据えたと思われる出題も散見された。

大学入試センターから発表された中間集計などのデータを参照しながら、5年生、4年生に向けて次年度以降の共通テスト受験に向けての資料を提供してみたい。

国語、数学、英語で平均点がダウン(中間集計)

大学入試センターから、令和2年度センター試験の平均点(中間集計その2)が発表された。中間集計のデータ数は約53万人で、全志願者55万8千人の9割強にあたる。下表に地歴A科目や英語以外の外国語などを除く主要科目の平均点と本校6年生の平均点を掲載した。昨年は「14科目で平均点がダウン」の見出しを付けたが、今年も「国数英で平均点ダウン」と厳しい状況である。全体の概要および確定平均点は2月6日に発表される予定だが、中間発表と大差はないとみられる。

令和2年度センター試験平均点等一覧

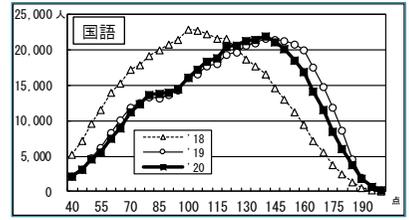
教科グループ	科目	配点	全国平均点			本校平均点		
			2020年度	2019年度	前年差	2020年度	2019年度	前年差
国語	国語	200	119.33	121.55	-2.22	非 公 開		
地理歴史	世界史B	100	62.96	65.36	-2.40			
	日本史B	100	65.45	63.54	3.68			
	地理B	100	66.35	62.03	1.91			
公民	現代社会	100	57.30	56.76	0.54			
	倫理	100	65.37	62.25	3.12			
	政治・経済	100	53.75	56.24	-2.49			
	倫理、政経	100	66.51	64.22	2.29			
数学①	数学Ⅰ 数学A	100	51.89	59.68	-7.79			
数学②	数学Ⅱ 数学B	100	49.05	53.21	-4.16			
理科①	物理基礎	50	33.29	30.58	2.71			
	化学基礎	50	28.20	31.22	-3.02			
	生物基礎	50	32.10	30.99	1.11			
	地学基礎	50	27.04	29.62	-2.58			
理科②	物理	100	60.69	56.94	3.75			
	化学	100	54.80	54.67	0.13			
	生物	100	57.56	62.89	-5.33			
	地学	100	39.52	46.34	-6.82			
外国語	英語	200	116.32	123.30	-6.98			
	リスニング	50	28.79	31.42	-2.63			

令和2年1月24日大学入試センター発表

※全国平均点の評価はセンター発表の中間集計と昨年の確定データとの比較である。国語の平均点は、現代文のみ、現代文＋古文、現代文＋古文＋漢文 の3パターンすべての集計である。大学入試センターは得点分布状況を公表していないので、以下の分布グラフは自己採点データ約43.7万件(全志願者の約78%)に基づいて作成されたものである。(データ提供:ベネッセ駿台)

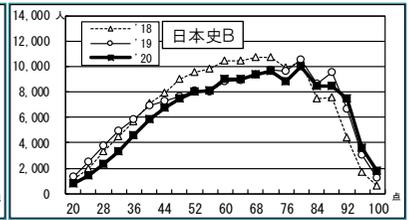
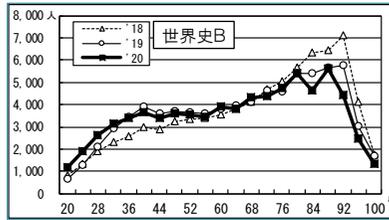
科目別概況

■**国語** 2017年は国語の平均点が前年より20点以上(200点満点、100点換算で11点)も下がり「国語ショック」と評価されたが、2018年も厳しい状況が続いた。昨年は前年、前々年より盛り返したが、国語ショック以前の水準まで戻ってはいなかった。今年は150点以上の層が減っていて、全国平均も昨年を下回る状況である。そういった中で、本校平均点は僅かではあるが、昨年を上回った。

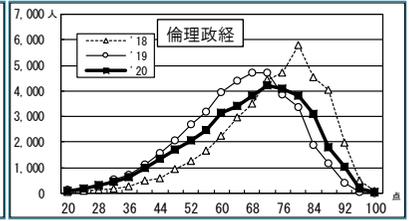
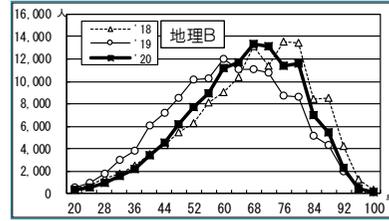


■**地理歴史、公民** 世界史Bで昨年比2.40点、政治経済で同2.49点のダウンだった。

地歴公民は7割近い平均点をマークする年もあり、分布のピークも高得点寄りで「やっただけ得点を稼げる科目」である。本校生徒の平均点も高い。世界史のピークが90点付近にあるのも例年通りである。5年生、4年生で世界史を受験しようとする人は、90点以上を目指さなければいけない。



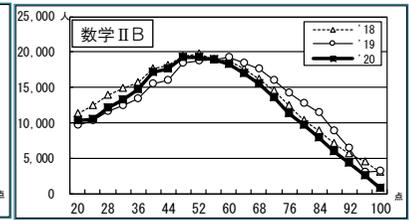
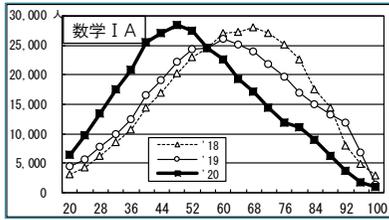
公民は、昨年4科目すべてでダウンした反動もあるだろうが、政治経済以外の3科目がアップした。現代社会は倫理と政治経済の問題から構成されていて、一般的には負担が少ない科目と評価され



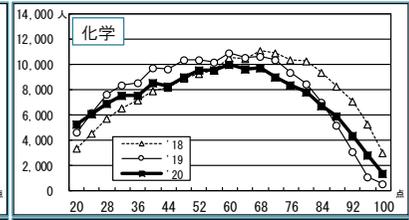
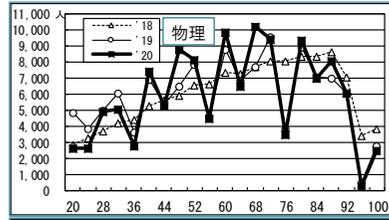
受験生も多いが、その得点分布が広がる傾向が強い。(倫理政経以外の公民科目のグラフは省略した)

■**数学** 3年前の国語の平均点ダウンが「国語ショック」なら、今年の数学Ⅰ数学Aの約8点のダウンは「数学ショック」とでも形容するのだろうか。中間集計の段階ではあるが、昨年よりのダウン幅が最も大きいだけでなく、15年に現行の学習指導要領へ移行してから最低レベルである。新テストの影響から、記述を選択する問題など、これまでにない出題形式が見られ、戸惑った受験生が多かったとみられる。

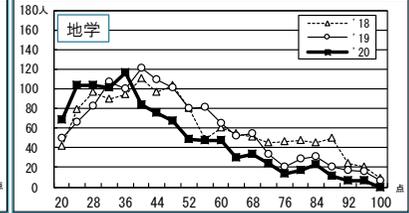
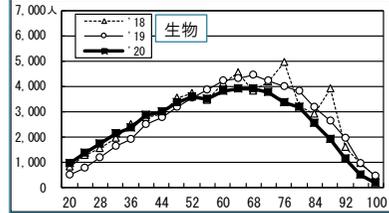
一方、数学Ⅱ数学Bも昨年を割り込む49点台。分布グラフの形状は昨年と同様だが、70点以上の層が減少し、グラフも全体的に左方向へシフトした。5年前の平均点が39点台という状況に比べれば、まだ救われるが、15年以降、平均点が6割を超えることは一度もなかった。



■**理科** 昨年基礎科目の中で唯一平均点がアップした化学基礎がダウンし、物理基礎、生物基礎との得点差が広がった感がある。理科①は国公立大文系志望者が多く受験し、化学基礎、生物基礎の2科目選択が圧倒的多数を占める。(基礎科目のグラフは省略した。)

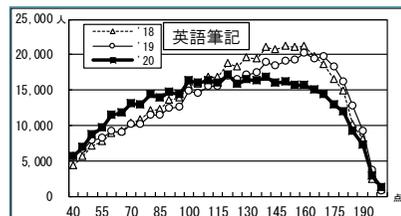


理科②は主に理系志望者が受験するが、文系でも大学によっては基礎2科目に代えて、理科②1科



目で受験可能などところもある。地学は平均点も低く、分布も低い方に偏っているが、これは地学受験生に文系志望者が多く含まれているからだと思われる。地学以外の3科目については、物理、化学が上がり、生物が下がった。これにより、科目間の平均点差は縮まった。物理のギザギザ分布は例年どおりの状況。化学は90点以上がやや厚みを増したが、2年前と比較すると高得点者が減っている。これも数学同様に、新テストの影響なのか。

■英語 例年受験者が最も多い英語筆記は116.32点で6割を切った。17年試験より3年連続でほぼ同じ点が続いていたのがダウンした。分布状況は右図のとおりで、例年なら8割(160点)辺りにあるピークが大きく下がり、5割~7割辺りにかけて広く分布している。200点という配点もあり、英語の得点で差が開いた事例も多くあるだろう。



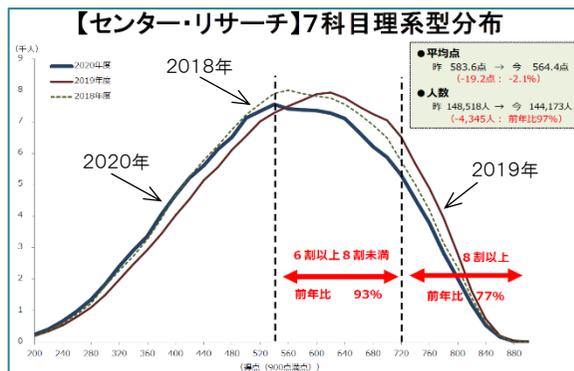
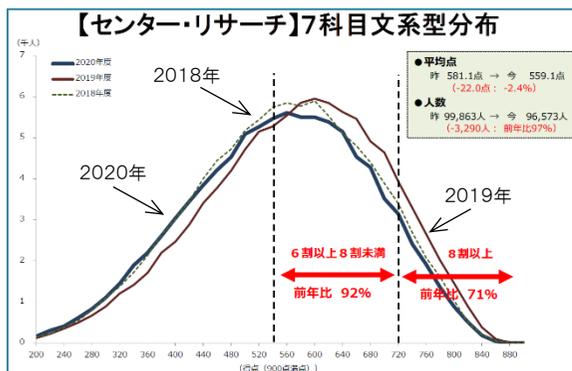
リスニングの分布グラフは省略したが、筆記同様に8割近辺にあったピークが6割近辺に移動している。

5 教科総合では、高得点層が減少

大学入試センターでは総合点の集計を公表していないので、自己採点データに基づく集計結果(河合塾提供データ数41.8万)を基に概況を眺めてみよう。

これによれば、国公立大で必要となる7科目の受験者平均点(900点満点)は、文系型では昨年から22.0点ダウンの559.1点、理系型では19.2点ダウンの564.4点(駿台ベネッセ集計では、それぞれ558.8点、568.4点)とどちらもダウンした。

得点分布状況は下図のとおりで、文系型、理系型とも左側にシフトして、昨年に比べて高得点層が減少しているのが分かる。科目別概況でみたように、国数英の3教科で平均点が落ち込んだことが大きく影響していて720点(得点率8割)以上の高得点層は文系型で前年比71%となった。理系型も前年比77%だが、物理、化学、地理Bで平均点がアップしたことから、文系型ほどのダウンはみられなかった。また、数学I 数学A、数学II 数学Bの平均点ダウンが文系型の方に大きく影響したと言えるのかもしれない。得点率6~8割の得点層も文系型・理系型ともに減少していて、今年のセンター試験は、高得点が取りづらい状況だった。



※この図版のみ、河合塾提供のものを使用した。データ元はほぼ同じで、分布状況も同じである。

大学入試ガイド(4) Road to University 新テストで求められる学力とは?

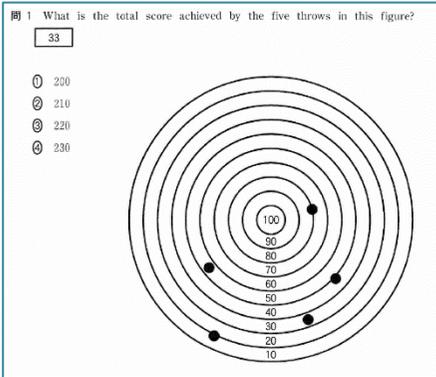
「ラストセンター」は受験生にとって少々厳しいものとなった。共通テストを翌年に控え、これを見据えた新しい形式の設問がみられた。今年のセンター試験を振り返り、5年生はもちろん4年生も大学が求めている学力が何なのかをしっかりと意識し、今何をすれば良いのかを考えていこう。

■ グラフや図表などを読み解く力

新テストの典型的な出題は、グラフや図表が多いことだ。地歴・公民や理科は科目の特性上、図表が多くなる傾向は否めないが、今年のセンター試験でも対話形式での出題、文章・図表など複数の素材の読み取りから考察する出題がみられた。

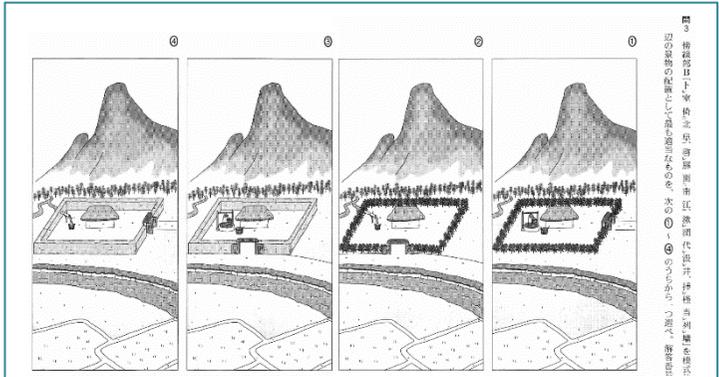
▼英語（筆記）第4問A問1

ボール投げに関するビジュアル問題
図の結果を見て計算させる新傾向の出題



▼国語（漢文）第4問 問3

漢詩の中で詠まれた住居の様子を4つのイラストから選択させる問題



■新テスト情報

新テストでは、英語の試験名が「筆記」から「筆記(リーディング)」と改められる。これまで出題されていた発音・アクセント・語句整序の問題はなくなり、読解に特化した試験になる。昨年度行われた試行テスト「筆記(リーディング)」の設問はすべて英語で、語彙数も約1000語増えた。語彙レベルは平易だが、英文の内容を「大づかみする力」が求められている。

また英語(リスニング)の試行テストでは、読み上げが1回の問題もあり、一度で聞き取る力も必要となる。

配点もこれまで、筆記200点、リスニング50点だったが、新テストでは各100点(試験時間は現在と変わらず、筆記(リーディング)80分、リスニング30分)となっている。合否判定の配点比は、各大学の裁量に任されるが、実用場面での英語力が試される試験内容となるだろう。

■問題が長文化する中、求められるのは読解力

今年のセンター試験・数学I Aの問題冊子のページ数は22ページで、昨年より2ページ増えた。試行テストでは27ページにも及び、問題文に会話文が登場するなど、各問題が長文化している。これまでの問題形式になれた人にとって、「まどろっこしい」と感じるのは当然だろう。数学に限らず問題文が長くなる傾向はある。

■新テスト情報

昨年に引き続き日本史Bで会話文形式の問題が出題された。試行テストでは、数学にも会話形式の出題があり、会話文から状況や設定を読み取る読解力が試される。多様なタイプの文章に触れ、その趣旨を理解できる力が求められる。

■時事的・実生活に関連するテーマを意識せよ

英語(筆記): 「慈善活動の企画」に関する大学生のやりとりにおける発言の主旨を選ぶ問題、「フリーマーケットの出店者募集の告知」の情報を読み取る問題など

現代社会: 「東京五輪・パラリンピックをテーマにした会話文形式の問題」や「成年年齢の引き下げ」「正規社員と非正規社員の手当の相違に関する最高裁判決」「働き方改革」など教科書に記載されていない時事的な内容

倫理、政治・経済: 「人工知能(AI)」「ノーベル平和賞受賞者マララ・ユスフザイ」「持続可能な開発目標(SDGs)」

物理: 日本の研究グループが命名権を獲得した新元素「ニホニウム」を扱った問題

■結論よりも途中経過を大切に学習を確立する

理系でも読解力が、文系でもグラフや図表を読み解く力が要求される。マーク式問題も選択肢が1つではなく、正しいものをすべて選ぶ方式も導入される。問題①で1を選んだら問題②の正答はA、2を選んだら正答はBというように解答も複雑化する。こういった出題に知識の丸暗記は通用しない。結論よりも途中経過を大事にする学びを実践することだ。平易な知識でも、これを丁寧に学習した生徒が試行テストで得点できているという情報もある。

▼数学I A第2問 [2](4)

散布図とヒストグラムを結びつける問題。扱われたデータは、男女別に集計された都道府県別平均寿命。散布図の縦軸(女性)と横軸(男性)の関係は $y = x + k$ と表し、直線の周りにある丸の個数をヒストグラムに関連付ける。教育課程の次期改定でも統計分野は重視されていて、データの分析は、ボリュームのある出題が続くだろう。今年は7ページにわたる出題。

